

梗概

*Immensee*における Wasserlilie の指し示す女性像を研究するにあたり、今まで一纏めに考察、研究されていた Wasserlilie を「花」と「茎」に分解し、それぞれがどのような役割を持っているのか考察し今回の研究をおこなった。

ヨーロッパの社会史的背景を基に男性が女性に対して抱く感情は宗教的、社会的背景からきていると踏まえる。男性の理想的な女性像を考察し、最後に Wasserlilie の指し示している女性がラインハルトにとってどのような役割を持っているのかを述べる。本論文の考察は主に *Immensee* の後半部分である Immen 湖の場面に重点を置き研究をおこなう。

ノヴェレは近代前期を生きた老人ラインハルトの男性中心価値観の目線で語られており、それはシュトルムの広義の意味での社会批評でもある。近代に適応した男性と、近代に適応できていない男性が書かれた *Immensee* の作品には、当時の男性価値観中心の社会から見る理想的な市民社会の男女像が存在する。

エリーザベトはグリム童話の「白雪姫」*Schneewittchen* の白雪姫同様に、男性の価値観によって積極的側面を封じ込められている女性である。エーリッヒから見た成長したエリーザベトは、物静かな女性であり、人形のように感情を抑え込まれた受動的側面が強調された大人しい娘である。彼女は積極的側面を持ち合わせておらず、*Immensee* の男性達の視点から見るとエリーザベトは受動的な女性である。しかし、彼女も本来は様々な感情を持つ人間の 1 人であり、1 株の Wasserlilie の「花」と「茎」に表されるアンピバレントな側面は、エリーザベトが人感情を持った 1 人の人間であることも示している。

ドイツの近代化に伴い、いずれ父親になり家と社会を往復して家族を養う役目を持っていた男性達は、明確に目指すべき近代市民的な男性像があった。しかし、近代市民の女性達は目指すべき近代化のモデルが存在していない。*Immensee* を女性に対する教育的、教養的要素のあるノヴェレと仮定すると、近現代を生きていた男性が求めていた女性像はこうあるべきである、といった完全なモデルは存在していない。

森の中にある Immen 湖の水、岸にいるラインハルトと Wasserlilie の花の距離からは、ラインハルトが人に対して持っている、距離感を表されている。ラインハルトが生きていく上で必要としている人と人との距離感は、近代化できていない男性の葛藤とも読みとることができる。

近代前期の価値観を持った男性が、近代市民的なモデルとして求めた女性像と Wasserlilie の「花」が象徴する女性が同一であることを本論文では証明する。